【 第8回スポーツリレートーク 】　報告
日時　6月28日(火)　19時～21時
場所　仙台市情報･産業プラザ　セミナールーム(1)B
テーマ　「仙台･宮城スポーツの今　～　災害(復興)とスポーツ(振興)」
講師　fmいずみ　取締役事業部長　阿部　清人　さん(防災キャスター)
―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

みなさん、こんにちは。私はｆｍいずみの阿部清人です。私のスポーツとのかかわりについては、ｆｍいずみが２０００年３月１０日に開局し、その中でプロスポーツとして地元泉区のベカルタ仙台の番組を日曜日の夕方やることになったことから始まりました。当時、メディアがあまりベガルタのことを取り上げない中で「特選ベガルタ情報」として３０分の番組をやることにしたのです。これは非常に冒険で、日曜日のゲームではゲームが終わりその後選手や監督の取材をし、スタジオにもどって５時からの番組のために編集するという綱渡りをしたのです。しかし、その結果番組を聞く方が随分増えました。その番組ではボランティアの方々、チームのフロントの方々にも随分協力してもらいました。その後は２００２年のサッカーワールドカップ宮城大会のために作られた市民組織「キックラブ」の会員となって活動もしました。

今回の災害ではスポーツ選手に勇気をもらいました。特にサッカーの長友選手の「日本の人々に戦う姿を見せたかった」というコメントは、常に戦っているスポーツ選手ならではのものだと思います。今回の震災ではみんな共通して困難な状態におかれました。そうした中でスポーツ選手のメッセージはやはり大きいものがあります。「心をひとつにして」というのはスポーツでは当たり前のことなのです。スポーツボランティアも十分に災害ボランティアとしての性格をもっており、支援物資を集めたりしていきいきと活動していました。一方でプロ野球では「この時期にやるべきか悩んだ」という選手のコメントがあったのも事実でした。

このたびの震災について話します。ＦＭいずみではスタジオが被害を受け私はＮＨＫから放送しました。「この揺れは長くても一分間です、まず、身の安全をはかってください。火元から離れてください」などと伝え続けました。さて、スタジオですが震災のときには天井からスプリンクラーの雨、非常ベルがなり停電し、ビルからでるように指示がありその後立ち入り禁止になりました。泉中央のペデストリアンデッキもあぶないということでＮＨＫ仙台放送局と災害時の協定を結んでいたのを思い出して、ＮＨＫ仙台放送局へ向かいました。そして、ラジオ第一のスタジオに入り、断続的にアナウンスに加わりました。後日東北リサーチセンターの調査では、災害直後の情報収集の約７０％がラジオということで、非常に大きな反響がありました。私がＮＨＫのラジオで伝えたのは、「地震の心構え」「寒い夜を過ごすにあたって」「避難所の方々へのアドバイス」「家族の帰宅を待つ方々へ」

「明けない夜はない」というものでしたが、真っ暗な中で余震を感じることで人は随分不安になりますし、真っ暗だと危険で動けないため車の中で過ごした人々にとって、明るくなる時間を告知したのです。

ＮＨＫラジオを聴いた方々からの声としては、「励まされた」「知っている人の声が聴けて安心した」「気持ちが落ち着いた」「次に何をすれば良いのかがわかり行動できた」「的確な指示に感謝」というものがありました。避難所には人数分の毛布の備蓄などがないため、また寒さをふせぐために教室にあるカーテンを使うことを伝えたところ実際にやられたところもあったと聞きました。また、新聞紙を衣服の間に挟むことで寒さが緩和されるということも伝えました。災害時は「公助・自助・共助」といいますが、災害発生直後は行政の行う公助が対応しきれなくなるため「共助」が非常に大切になるのです。NHK 放送局の前には、テレビを見る人とラジオをきく人がいました。そのときの内容はテレビは全国に向けて被災状況の映像を発信しており、ラジオはすぐに役にたつ情報を生活情報として伝えていました。いわばテレビは外向けであり、ラジオは内向きということがわかる光景でした。

翌日は泉中央のビルに入って使える放送機材を取り出し泉区に協力いただき泉区役所の会議室からＦＭいずみの放送を開始しました。３月１２日の１３時のことでした。目の前にみえた物資集積所の情報、生活者の視点でまちに出て集めた身近な生活情報を伝えました。ある居酒屋の張り紙をみて気づいたのは、丁度３月は歓送迎会の多い時期であり食べ物の備蓄が多くあるはずだ、とすれば食料の提供ができるはずと予測し現実に居酒屋が一番早く弁当を販売しました。七北田小学校という避難所では約１，０００人の避難者の混乱が一切ありませんでした。何故なら教頭先生がメガホンマイクを利用して的確な指示をしたからです。きちんと指示をしたこと、日ごろからの地域との信頼関係があったことが大きかったのです。

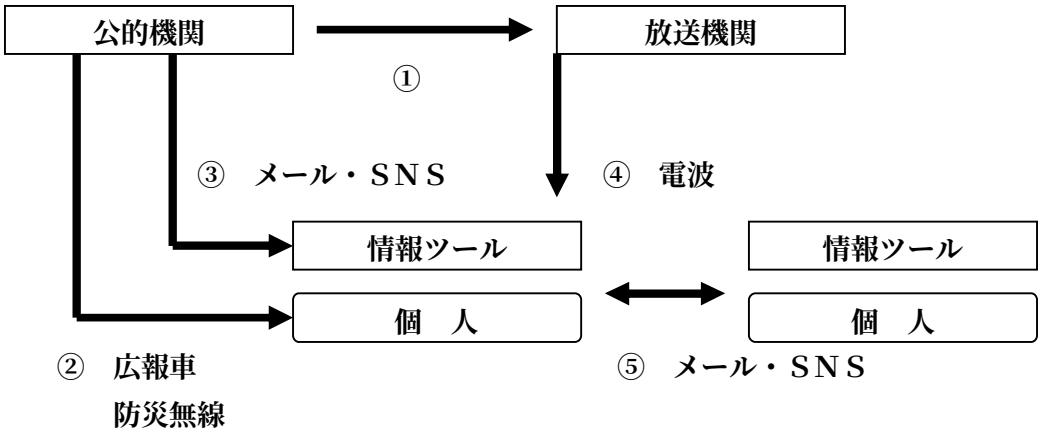
コミュニティＦＭは小さな出力で限定されたエリアに対し放送するものですが、１９６６年から増えていて、特に１９９５年の阪神淡路大震災で情報を発信した「ラジオフェニックス」の影響が大きいといわれています。今回の震災では「臨時災害放送局」というものが２６局開設されています。これは大規模な災害時に臨時に認められるラジオ局で、出力も１００ワットまで認められています。県内では塩釜のＢＡＹＷＡＶＥ、山元町のりんごラジオなどさまざまな特色をもって地域のために活動しています。また、意外にしられていませんが現在はコミュニティＦＭの放送がネットできけるサイマルラジオというものも出てきています。こうした環境の変化に対し災害時に強いＮＨＫでは過去の経験をいかして「安否伝言ポスト」という携帯電話などを活用した仕組みを使いました。このほかテレビのＬ字画面も今回使用されました。メインでは通常番組を流し、Ｌ字の部分で生活情

報を発信したのですが、作業が膨大なため常時ということは難しいようです。

情報遮断ということばがあります。これは「人は情報が十分にないと限られた情報で判断せざるを得なくなる」、というものですが、社会全体で正しい情報を提供し、この情報遮断が起きないようにすることが大切だと思います。このあたりはスポーツのボランティア活動にも通じるものがあるのではないでしょうか。災害時にはスタジアムのアナウンスが重要になります。常に情報を伝達する手段を持つことですが、地域を限定して送信するエリアメールの機能を活用すれば、ボランティアスタッフや観客への一斉送信なども可能になってきています。災害時において、スタジアムで大勢の人に正しい情報を伝えることはとても大事です。

阪神淡路大震災のときには、まだネットの普及が十分ではない時期でした。中越地震のときにはネットは普及していましたがＳＮＳ（ソーシャルネットワーク）の普及の前でした。今回の東日本大震災ではネットもＳＮＳも普及しており、その結果市民レベルのＮＰＯの動きが非常に活発になっています。

【 災害情報の伝達経路 】




① 情報機関の情報収集はあらゆる手段で行われます
② 広報車の危険度・防災無線の故障が課題
③ 年々発達している
④ デジタル化がすすみ情報量が増加した
⑤ 携帯電話の普及で拡大している

これ以外ではアナログなことですが、張り紙をする場所を決めておくことや、時間とともに災害情報のメスメディアへのニーズが変化することがよくわかりました。おどろいたのは、地元新聞が震災の翌日届いたことで、これは災害協定を結んでいた新潟の新聞社の協力があったと聞いています。こうした危機管理の大切さ、さらに今後は防災教育という

ものについてもしっかり取組む必要があります。

　震災以降、被災地のプロチームはさまざまな被災者支援に取組みました。ベガルタ仙台は「宮城・東北ドリームプロジェクト」というものをたちあげ一口３１５，０００円で７月以降の試合に被災地の家族を招待する取組を始めていますし、楽天イーグルスでは「震災孤児支援」のため一勝するごとに１００万円を積み立て、「ガンバロウ東北」のワッペンは１０万枚以上を売り上げています。今日の話しはスポーツボランティアの活動とは直接関わらなかったかもしれませんが、情報の共有や危機管理について参考になればと思います。どうもご静聴ありがとうございました。